

■ 書 評



ヤウレックとフロイト

著：南光進一郎
日本評論社 2012年4月
336頁，定価 5,250円

著者は、わが国で統合失調症の近代的な遺伝研究を始められた著名な精神科医の一人であり、2012年春、帝京大学を定年退職され、それを記念してこれまで先生が集められた文献、写真などをまとめられて本書ができたのではないかと推察している。著者は、20数年前に「分裂病の起源」という本を訳され、その中で統合失調症が産業革命以降に発症したのではないかという仮説を紹介されたことがあり、衝撃を受けたことを昨日のこのように覚えているが、今般、上梓された「ヤウレックとフロイト」も、同じように新鮮で、感動を持って読んだので、特に若い精神科医に本書をお勧めしたい。

本書は著者が長年集積された文献や自ら撮られた写真、多くは有名な精神科医のお墓が本の端々に載せられており、表題通り、ヤウレックとフロイトにまつわるエピソードはもちろんウィーン大学医学部精神科に連なった著名な精神科医が同じような年代で過ごし、わが国の呉秀三(東大第3代教授)、三宅鑽一(東大第4代教授)、今村新吉(京大初代教授)、斎藤茂吉(長崎医専第2代教授)などが神経病理学を学んだ当時の熱気や活気が伝わってくる文章になっている。ナチスやユダヤ人排斥の問題など時代背景もわかりやすく説明がされており、精神医学史に興味を持つ者にとってはたいへん読みごたえがある本になっている。精神科医であれば無意識という概念を発見したフロイトのことは知っていると思うが、ヤウレックについては精神科医の中には知らない人もいないかもしれない。ヤウレックは精神医学分野において初めてノーベル賞を受賞し、精神医学史に名を残した

巨人の一人である。そのヤウレックとフロイトは、ウィーン大学医学部に同年に入学、卒業し同じく精神医学・神経学を学び同じウィーンに70年間近く住んでいたこと、また同じ83歳で亡くなったということを知った。ヤウレックは、進行麻痺の治療法としてマラリア発熱療法を発見し、多くの患者を治療したが、ノーベル賞受賞後わずか20年たらずで、ペニシリンの発見によってその治療法は消え去り、歴史のひとコマとして残っているだけである。一方、フロイトは、一開業医として精神分析学を発展させ、今なお精神医学、心理学のみならず、社会学、文学、芸術の領域にまで影響を与え続けている。この両者の業績を比較して考えるとたいへん興味深い。

本書は、このような歴史を始め、わが国の梅毒の治療法、斎藤茂吉がヤウレックの講義を受けた時の様子が克明に描かれている。さらにノーベル賞の汚点の1つとなった白質切截術(ロボトミー)を始めたエガス・モニスの歴史についても本書は触れている。彼は61歳という高齢になって、ロボトミーを始めたが、湯川秀樹博士がノーベル物理学賞を受賞した1949年に「ある種の精神病に対する前頭葉白質切截術の治療的価値に関する発見」でノーベル生理学・医学賞を受賞した。現在も使用されているアンギオグラフィーでノーベル賞が授与されていたら、彼の汚名はなかったかもしれないが、どうしてこのようなことになったのかという経緯も書かれている。モニスがポルトガルの英雄として大統領にもなる可能性もあったことなども記され、ヤウレック、フロイト、モニスがどのような人物であったのか時代背景を交えながら情感豊かに書かれている。

本書の後半にはウィーン医学散歩として、ウィーンが音楽の都、文化、芸術の都だけでなく医学の都であったことをウィーン大学周辺、レオポルトシュタット、リンク内、ウィーン郊外などに分けて書かれており、その他フロイトが晩年亡命したロンドンなどヨーロッパにおける精神医学に関連した著名な学者の自宅、大学なども描写されている。

(中村 純)